

COSMOS集



舌にまるやか 尾形久子 群馬

拾ひものと思へるほどの秋晴れよけふは行田市を旅する日なり
たんぼアート初めて見たり『アオアシ』のメンバーの顔なんともリアル
大和いもとねぎを使ひし熊谷のご当地。ザは舌にまるやか
「おかあさん、咲きましたよ」とうす紅の小菊を供ふ九回目の秋
花水木あまた着てゐしあかき葉を脱ぎ始めたり明日は立冬

鈴 打 つ 神谷倫子 埼玉

着付け後の帯のゆがみを確かめて直してくれし夫の手こひし
待ちわびた茶会の再会よろこびて干菓子につづく薄茶に和む
霜月に夫は生れしが八十の一世とぢしも霜月なりき
亡き夫の八十二歳の誕生日タカノのケーキ供へ鈴打つ
柎も古木となれば鋸歯失せて静か初冬に良き香はなちぬ

山下公園 末光 奈緒子* 神奈川

母からのLINEを読めど既読にはしない技持つ息子うらめし
初めての車を母に見せに来た息子が急に大きく見えた
震災の瓦礫の上の広域な山下公園飾る秋薔薇
ギネスには最も高い灯台と記されていたマリントワーは
旧友と卓を囲みし中華街聘珍楼が店畳みけり

里の秋 高木裕子* 神奈川

施設から三年ぶりに戻りたる母は楽しげ声もはずみて
茶碗蒸しひと匙ごとに食む母のくちびる赤く幼のごとし

水上 芙季選

「あすなる集」特選

欠けてゆく 佐藤道子* 秋田

うす絹の白き花びら重ねいて秋明菊は庭の女神よ
四方より石路の花立ち上がり見守ることし老いし二人を
西空に白き半月残りいて歩く人なし日曜の午前
欠けてゆく月赤黒く輝きて天体ショーだと呼べど夫は来ず
雨止みて雲間より出でし半月の隣に光る星一つ見ゆ

世界の怖さ 松井 奏* 茨城

飲みかけの緑茶置きっぱなしにしてドライブに行くなんていい日だ
よれよれのTシャツを着てたらだとして自分のこれじゃだめだな
パソコンのフレームにひび入れちゃってめっちゃ悲しむ十一月八日
日が暮れてまた朝が来て終わりなく続く世界の怖さに気付く
弟の日本語力に驚いて元氣もらって抱きかかえたり

孫の名も忘れてしまった母なのに教育勅語はすらすらと言う
卒寿なる母を囲みて「里の秋」歌えば昔の家族にもどる

大野 英子選

6 3 4 久保親 二*東京

昼寝する我に寄り添う愛犬の634の体の温もり愛し

歌うたえば体を揺らしリズムとる吠えることない俺の634が
我が胸の中で小さく「ワン」と言い笑顔浮かべて634は逝った

一緒に寝る634起こさぬようにして寝返る気遣い今日からは無し
カナカナと鳴くひぐらしにさびしさを感して歩く634亡き今

旧新潟市立工業高校 和泉邦子 新潟

秋の雨松と紅葉はあざやかにビルを煙らす空中庭園

ゆるやかに信濃川べりまでつづく桜もみちの空中歩道
いつか見た銅版画のやう丸い目の小鳩が一羽雨やどりする

枯葉散る銀杏並木の交差点防音シートが学び舎かこふ
役を終へ静かに解体されていく旧新潟市立工業高校

ニシムクサムライ 折笠瑞枝*新潟

お礼肥れいぞを施しにいくという友にいい言葉だねと返す秋の日

夜ふけての母の電話に深呼吸やわらかな声じゅんびして出る
霜月も唱えて確認ばあちゃんが教えてくれたニシムクサムライ

デッサンの鉛筆をけずる木の香立つ十一月の午後の教室

大佐渡も小佐渡もはつきり見えるから秋の窓辺にみなが寄りくる

山手線の駅名 高橋 梨穂子*新潟

時々寂しくなっちゃうわたしにはうまく使える方言がない
浮かんで声に出さないまま消える言葉の代りに息は吐かれる
山手線の駅名が並ぶメモがあり高輪ゲートウェイ駅がない
ひとつのおみたいなもくめがよつつありおおきなくちでそろつてうたう
わたしもうだめだろうなあとろとろとつめたいいおんけいをはさんで

ささやかな秋 宮沢民子 新潟

女の孫は手紙を書くねとグータッチして改札の人混みに消ゆ
吾亦紅を益子の壺にたつぷりと活けて窓辺はささやかな秋
この冬の寒さ厳しい予報ありマチュピチュ土産のマフラーを出す
秋の陽の傾くをうけ童胆は濃き藍色を鮮やかにせり
耳もとで振ればさりさり音がする小瓶の中のエジプト砂漠

純白の羽 内藤丈子 福井

菊祭りの菊花のペガサス越前の蒼穹見つめ香りを放つ
たらちねの母の手を取りゆく園の菊の木馬の花の色澄む
味噌汁に菊花を散らす菊花汁子ども食堂に秋が来てゐる
雷鳥の純白の羽ふるへるや白山にことし初の冠雪
ひんやりと栗名月ののぼる夜は母の手縫ひの半纏はおる

原賀 櫻子選

ダラム大学 高橋 みどり*愛知

結納も結婚式も雨でした ひとりになって今日の秋晴れ

般若寺の秋桜畑に立つ我の肩の高さに舞う揚羽蝶

来年もその翌年も生きている前提で組む三年ローン

死ぬまでに叶えなかった夢ひとつ六十過ぎの手がつかみとる
還暦をすぎたわたしの入学を認めてくれたダラム大学

モクセイ科

奥 永 敬 子 三重

運転中規制を受けし車中より山車巡行に出合ふ幸あり
頂きし菌床椎茸早も出て箎いづばいを秋陽に干したり
柗の白き小花の甘き香よさうあなたはモクセイ科だね
秋入陽に向かひて走る高速道光と影の線となりたり
貰ひ物の柿持ち行けばお裾分けと次郎と富有を交換したり

草 津

岡 田 美 子*京都

まだ深い闇から眠りを引き上げて目覚まし止める旅立ちの朝
早朝のバスの揺れるに身をあずけ動き始めた街を見つめる
夜更けまで話したこともさつぱりと布団に残して宿をあとにす
濃紺の粒がゆっくり沈むごと夜にまぎれる草津の湯宿
月食と惑星食を次に見るこの地に人は生きていますのか

個 展

青 木 淳 子 鳥 取

青年のやうな心を持ちてゐる叔父の油彩の個展はじまる
城跡の堀と老松描きたる絵より現る光が風が
をりをりの表情みせる 樗谿公園は画家叔父のアトリエ
一匹の蜂迷ひ込み観賞の人らと個展会場めぐる
最終の個展とならむ八十五の叔父の油彩の紅葉あざやか

熊の食卓

石 田 信 夫*鳥 取

ふたり分作る相手がいる朝餉母によそえるご飯みそ汁
「赤灯せきとう黄緑おうりよく青藍紫せいらんし」唱えたり虹はころと目をストレッツ
背高が三十センチの泡立草シヨートカットの黄色がいいね
道端に首切り地藏が祀られて家族総出の稲架いなかかけ進む
どんぐりをバシバシ踏んで歩く山この冬豊かか熊の食卓

秋 霧

中 村 恵*鳥 取

浜辺さん浜本さんから磯辺さん回覧板は順に迎れり
獅子柚子がじきに生るなあ配らにゃあ柿も南瓜ももらったまんま
浜田さん田中さん経て田淵さん田んぼがすこしずつ深くなる
督促の電話進まぬあきのひの五時はゆうやみスライム握る
秋霧はアイロン台に生まれおり日曜のためしやんとするシヤツ
水上 比呂美選

君 の 唇

新 明 恭 子*香 川

四年前家を押し流しし肱川が流れのうえに屋形船のす
三日かけ玉葱七本を植えまあるくまあるくまでさする膝
掻い掘りの成願寺池にこうのとりのいづれより来ていづれにゆかむ
大き目の里いもおでんふうふうと食めばはじまる皆既月食
すべらかな羽二重餅にふれし時君の唇記憶にあつた

立 冬 迎 ふ

西 森 恭 子 高 知

飛行機雲のびる大空にゆるやかな鳶の旋回あかず眺める

文旦とりんご並べて黄と赤が仲良く映えるそつとして置く
傘差すにおよばぬほどの今朝の雨空仰ぎつつ立冬迎ふ
鶏頭と風船蔓の種子採りて花壇は次の季の準備す
百均の店は万屋よろぐやなんでも屋バケツ一個を百円で買ふ

初めましての光

永田 恵美 福岡

カーテンを開け窓を開け今日の日の初めましての光を迎ふ
夫亡くす人と持たざる私は等号、ではなく等号否定
秋の雨赤信号の中におゐる人も濡れてる公園の道

信号がずつとずつと向かうまで向かうまで赤い夕暮れの道
文庫本ポケットに入れて街に出る文庫本好きの風が寄り来る

呼子朝市

垣野 幸一 * 長崎

腸を出しつくしてもなお跳ねる魚売りたる老いに主婦ら集まる
組板の跳ねる魚に包丁をあてながら売る呼子朝市
烏賊ひろげ竿に吊るして並べ干す港の媪背を伸ばしつ



桑原 正紀選

「その二集」特選

地球の影

秋山 幸子 千葉

「詳細はQRコード見てみて」と吊革広告なにも語らず
美しき月を脛に焼き付けて忘れぬための皆既月食

恵比寿さま祀る港の祠にはワンカップ酒あまた供えらる
台風之余波残れるや港には釣り船幾艘舫い並びぬ

黄花コスモス

吉田 静子 長崎

雑草の茂みの中にコスモスと黄花コスモス競ふがに咲く
庭に咲く黄花コスモスまたの名を特攻花とよびし戦中
特攻兵黄花コスモス一輪を持ち往きしとぞ聞きて哀しむ
特攻の持ち往く黄花コスモスも共に散りしか大海原へ
わが兄は特攻でなけど海軍の志願兵なりきテニアンに逝く

ポポン、スカット

木場 美枝子 鹿児島

島人しまんぢゆらユーモア混せて迷演技、島の文化を語り継ぎをり
秋長けて島にはかに活気づくジャガイモ植彙の真つ盛りなり
初ならむ北海道の高校の修学旅行が徳之島に来
「うん、いいね」ポポン、スカットと秋の夜に三年ぶりの花火が上がる
またしてもインターネットつながらぬルーターたい雷にやられたらし

月仰ぐ静かな秋にふと香るどの花だらう甘く優しく
去りゆける地球の影の円弧にも別れを告げる寂しき秋夜

コロナ禍に母を見送りはや二年ことしも銀杏の黄葉もみぢ眩しき

ひとりに還る

人見 江一 * 神奈川

終電を降りた人々足早に日付をまたぎ家路をたどる

背表紙が「あなたのものよ」とささやいた学生街の古書店の午後
初めての稲刈り終えて稲藁の匂いをまとい夕衝行く

木枯らしに襟立てながら野の道を一人で帰るひとりに還る
二階堂の地名に残る永福寺滅びし堂宇アブリにて見る

ヤマカガシ

奥

呂美生 東京

戸の道に動くもの有りゆうると戸袋めざし這ひゆけるかな
驚かれ騒がれし後この家に辿り着きしか足ももたず
這ふ様を話せばそれはヤマカガシ毒もつ蛇と市の人言へり
いづこへと這ひてゆきしかヤマカガシこほろぎ細く鳴く昼ひなか
わづかの間とどまりて今ぬ蛇の存在そこに漂ふらしも

内部を掬う

清水美里*東京

おやこは百足の家か物干しに靴下靴下無数に揺れて
新しく晒す断面 Tears のハートにカーソル触れて離れる
書記が要る わたくしをはみ出していく全てを速記にて書き留める
何度目の何年ぶりの蝕であれ欠けていくためだけの重なり
切り込みを十字に入れてスプーンで掬う熟柿は私の内部

夫になります

宮 梓 一*東京

種を蒔く人になりたい大切な芽に水をやる人になりたい
「35歳会社員」明日からそれは二番手、夫になります
いいじゃない今夜のカレーに入ってる芋が煮込まれていなくなつて
窓際のパキラもどこか陽気で1+1じゃきつと足りない
星野源の「アイデア」を聴くためにあるわけじゃない上毛高原

藤野 早苗選

二 倍 速

佐藤彩湖*新潟

新郎の父が大泣きする横で出遅れ新婦の母われ泣けず

わたくしが悩みて温泉に行くよりも身軽にひよいと国渡る吾子
秋の陽の小さなかけら一つずつ集めて咲けり黄のオミナエシ
朝刊に除雪機のチラシ折り込まれ雪に埋もれる冬がまた来る
秋の実をついばむ鳥の如くわれデラウエア食む二倍速にて

柱状節理

小森鈴子 岐阜

塾の部屋を抜けて月食見しと言ふ孫をほめやる心の中で
道問へばスマホを出して見せられる今日また出会ふよき若者に
鈍のごと柱状節理が天をつく岩の島にもオリブ実る

ゴジラみたいと言ひつつ孫は楽しげに芋の芽掻きの手伝ひをする
馬鈴薯の芽をとるこつを覚えたる孫にまかせる最後の一杯

金のミスト

権田陽子 静岡

紀元前三千年の無花果の末裔を今かぷりとかじる

ひつじぐも空の牧場に群れをなし北北東をめざして進む
小さき指にへアゴム操り四歳のポニーテールは出来上がりたり
お祭りが逃げて行くよと焦れる子に紅き文庫をきゅつと締めたり
木犀の香の立ち初めし夕まぐれ金のミストのまん中をゆく

凶事 吉事

池田あつ子 愛知

鴉鳴きさびしきわが耳それを聞く互ひにこの世の片隅にゐて

高みから鴉が鳴くと「アホやなあ」言はれたやうな気がするいつも
そこにある古き榎の梢より鴉は見えてゐる凶事古事（黒がとよと）

国葬の喪服の波は肅々と武道館へと吸ひこまれゆく
左脚引きずりながらゴミ袋あさる鴉と見守る鴉

耐 久 度 小 田 沙也加*愛 知

不確かさを確かに告げる准教授のわずかにずれたままの腕時計
地下鉄が地上にあらわれるときにふえる光は天国に似て
暗黙の了解のこと理解する時間と耐久度がつりあわない
スニーカーの中でちぢまる靴下を直せず秋の横断歩道
二番目のボタンがほつれてこうやって思い出も消えてゆくんだろうか

狩野 一男選

香 木 木 村 つや子*奈 良

黄金に我も染まりて散歩せり公孫樹並木の天理界限
町はもう年末セールで賑わしい超高速で一年過ぎん

日本の農業永久に守れかし「国消国産の日」が決まりたり

「全浅香」（ぜんせんこう）聖武、光明の香木やガラスの中から香って欲しい
「全浅香」一メートルの香木よ過去に切られし跡なまなまし

七 十 手 前 の 芝 崎 千 鶴*和歌山

時間かけ一つぶ一つぶ皮をむき秋のめぐみの栗飯を炊く
紅葉の下で写真におさまりぬ七十手前の夫と我なり

完全にリタイアしたと友の言うすつかり初老の女になりて
信長もこの天体ショー見ていたか皆既月食あか黒い月
我が家でもお掃除ロボット導入す働く姿はまことに健康

生 き る 力 牧 野 雅 子*佐 賀

ダイエツトで筋肉増やし体重を減らすというは至難のわざなり
暖かな秋の日差しを浴び憶う実家の柿の旨かりしこと
「ちようどいい」予報士さんが使つてる言葉は今日の気象にぴったり
子と言えど気持ちのズレの修復は大人になればさらに難し
あれこれとやりたいことの多くあり生きる力のあるってことね

チエツクイン・アウト 前 田 泰 隆 長 崎

羽田から乗らずに済んだモノレール克服できぬ高所恐怖症
チエツクインを待つ人の背に提げらるるヘルプマークに声かけできず
世の中のコロナ禍ゆゑの進歩かなカードを箱へチエツクアウトす
永田町陳情の人あまた居てセキユリティゲートの議員会館
フレッシュユな県選出の議員さん手の平見せて陳情を聞く

モ ク モ ク 西 山 伊智子 鹿見島

香り立つ新米の飯（いひ）モクモクと山盛りにして幼食べゐる
目寛むればバツタやかまきりのウオツチング草むらソロリソロリ孫行く
くつ買へば怪我せぬやうにトイレで履く我が家の習ひ孫がまねをり
誘はれし（健康マージャン）初めての点棒牌に胸の高なる
我を呼ぶ亡き弟の夢を見ぬ「まだ早いよ」とまた眠りたり